世間のことは、酢いだけ知って、甘いを知らずに居てはならぬ。
最も厭ふべく、恐るべきは、半信半疑、半知半解、若存若亡の所に居る人である。

**佐々木　月樵**
（体験え宗教より）

昭和50年11月1日
編集・発行
岡崎市教育委員会
印刷
研文印刷社

（一人一鉢コンクール ―― 細川小）

# 先手教師と後手弁護士

弁護士　**杉浦鉦典**

足かけ十年の教員生活を辞して、弁護士になってから今年で十年になります。岡崎にささやかながら独立した事務所をもちました。弁護士としてやっと中堅の部に入ることができたでしょうか。しかし何か欲求不満で、気持は重いものがあります。弁護士法第一条には「弁護士は基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする」とあります。まさに正義の味方「月光仮面」同様の輝かしい使命を負わされているわけです。ところで現実の仕事はどうでしょう。我々弁護士事務所の扉をニコニコ明るい笑顔で開けてくるお客は一人もおりません。

ある人は信頼する息子が警察の捕われの身となり、世間体を苦にしながら弁護の依頼に見え、ある人は金銭上のトラブルで夜も寝ないで思い悩んだ挙句の相談に来られ、その姿は身のほそる思いに痛められたものばかりです。

ところがこうした悩みに対し弁護士ないし裁判所は十分その期待に応えているかと問われれば、残念ながら自信のある答えができないのです。特に最近の個人の権利意識の強化、そして価値観の多様化が、紛争を複雑激化する一方、これに対処する裁判所側の人的物的組織の量的不足からくる裁判の遅延等で、事案の早期解決は極めて困難な状況にあります。

しかしひるがえって考えますと、そもそも法律による紛争の解決とは所栓、後手に廻り、尻ぬぐい的役割からまぬがれないものがあるのです。ここに弁護士としての使命にも限界を感じざるを得ないのです。欲求不満は仕事の拡大と共に深まる一方となります。

ところが私もかつて教員であった縁から、PTA等各種会合で法律の話を頼まれ、学校を訪れる機会が多くなりました。

校門を入り子どもたちのざわめきを耳にしたとたん、思わず頬がゆるむのを覚えます。それは何と明るく希望に満ちあふれた空気でしょう。暗い留置場から釈放された気持とはこんなものではないかと思います。私が夢中で過した教員時代には感じなかったものです。そこにはやっぱり「人をつくる」という教師のすばらしい使命が輝いて見えます。弁護士の職務が「後手」ならば、教師のそれはまさに「先手」そのものです。その前には社会正義と人権擁護という弁護士のスローガンもあせて見えます。

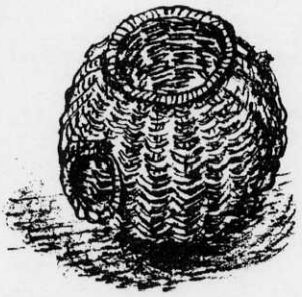
私の教え子が成長して不幸にも罪を犯し、弁護を引受けることがあります。その気持は極めて複雑なものがあります。刑の軽きを望むだけでなく、何とか更生の道をと一生懸念弁護活動に取組みます。しかし、もはや後手に廻ってしまった空しい気持はどうすることもできません。そんな時、子どもらの末来に夢をたくした教員時代がなつかしく、そして生きがいあるものに思えてなりません。

教師の皆さん。社会のしりぬぐいは後手ながら我々弁護士が処理します。どうか子ども達の末来の為「先手先手」と思い切りやって下さい。うらやましい気持でお願いするのです。

（旧甲山中・城北中教員）

—いまはむかし—

# 図画・手工から図工・美術へ



**●花開く図工教育**

昭和初期、山本鼎の自由画教育運動に共鳴した岡田栄次氏らは、「感じたままを感じたように描く」個性的な図画教育を実践。明治以来の、臨本に載せられた絵を模写する画一的形式的な図画教育に警鐘を鳴らす。

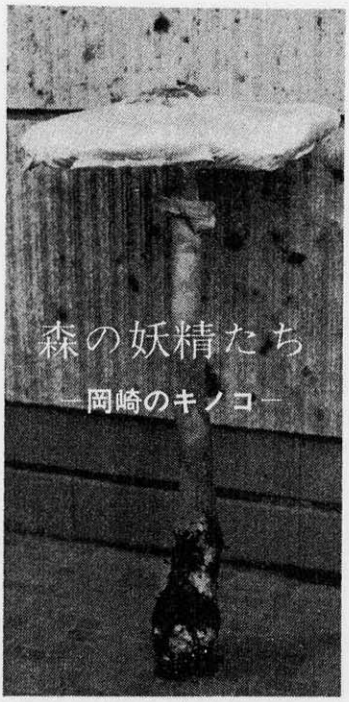
水彩画が中等学校を風靡し、やがて小学校に流れこみ、三河各地では写生大会がはなばなしく開かれるようになった。期日が迫ると、絵の選手は授業もそこそこに、写生会場へトレーニング。授業後は、毎日残って絵筆を握る。光と影との コントラストを強調、「陰」と「影」を描き分けることが要求された。

**●高等科で手工を**

梅園、三島の高等科に手工室ができ、当時としては珍しい動力機械が置かれたのもこのころ。カンナ、ノコギリ、ノミ

## ふるさとの自然

# 森の妖精たち
## —岡崎のキノコ—



カラカサタケ

茸（キノコ）というと、一般にシイタケ、マツタケのように「傘」や「茎」があるものを考えがちである。しかし、キノコの仲間にはキツネノチャブクロやキクラゲのように傘や茎がはっきりしていないものもある。また、学問上ではキノコという分類上の位置はない。キノコは通俗的、便宜的な呼び方である。

キノコは世界中に数千種もあるといわれている。岡崎市内で見かけたキノコの変わり種を紹介する。

◇小さなキノコ＝アカコブタケ

直径二～三ミリの球状のキノコで、枯木の表面に群生する場合が多い。写真は真福寺の山林で採集したものである。

◇大きなキノコ＝カラカサタケ

昨年の十月、連尺小学校の児童と遠足に行った帰途、伊賀川の提防でクラスの子たちが発見した。はじめ見たときは、付近の子がいたずらに発泡スチロールの半球を竹の先に突きさして土手に立てておいたものかと思った。

採集したときは傘はまだ開ききっておらず、直径十七センチばかりであったが約一時間半後には直径二十五センチにも広がった。傘の頂上から茎の下部までの高さが四十七センチ、茎の太さが直径五センチのジャンボキノコで、色はクリームがかった白色、傘の裏側にあるひだは純白色の大変美しいものであった。図鑑で調べてみても、これだけの大きさのものは規格外で、まさに超特大級である。

◇楽しいキノコ＝ヒトクチタケ

成長したものは表面がうす茶色で、つやニスをかけたような光沢のある、松の枯木によくつく丸いキノコである。形や色はあまりパッとしないこのキノコが楽しいキノコであるゆえんはその裏面にある。写真でわかるように胞子がとび出した口がちょうど幼児が口を開いたようなかわいらしい形をしているからである。山道でこれをみつけるとひとりでに笑いが出る。楽しいキノコである。

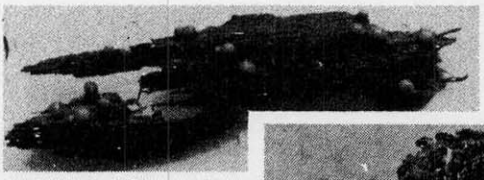
◇置き物にもなるキノコ＝カワラタケ

カワラタケは一か所に非常に多くの個体が群生する特徴を持っている。枯木へのつき方によってはとてもすばらしい形をつくることもある。乾燥させて置き物にすれば、一般にはみられない装飾品として楽しむこともできる。

◇

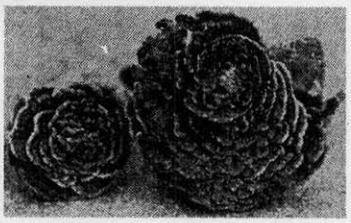
秋はキノコの季節である。山林に足をはこべば、もっと多くのゆかいな色や形の森の妖精たちにめぐりあうことができる。食べられるキノコ狩りも大いに結構であるが、秋の一日、自然を楽しみながらのキノコ狩りなどいかがであろうか。

（城北中　加藤直男）



アカコブタケ

ヒトクチタケ



カワラタケ

---

は個人持ち。本立てなどの製作を主とし木工の基本をみっちり仕込まれた。道具の手入れは特にやかましく、厳しい目が光っていたという。

**●夢は大空へ**

戦時中は、ご時世を反映。模型飛行機竹とんぼ、杉玉鉄砲が大流行。模型飛行機は必修教材。少ないローソクの火を心配しながら「ひご」を曲げる。あぶり方のこつがまたむずかしい。和紙を翼に張り、きりを吹くと、いよいよできあがり。ときめく胸を押さえて、ゴムを巻く。旋回する愛機を祈るように見守ったもの。

**●わらじカツ**

昭和二十五、六年。学大の美術教室は近隣の教員が集まって来て、熱気と喧騒にみちていた。夜になると、近くの食堂から「わらじカツ」をとる。噛んでも噛んでも噛み切れぬカツ。子供の話、絵の見方、教育論に花が咲く。自ら求めたこの研修が、今教室で生きている。

**●実用から創造へ**

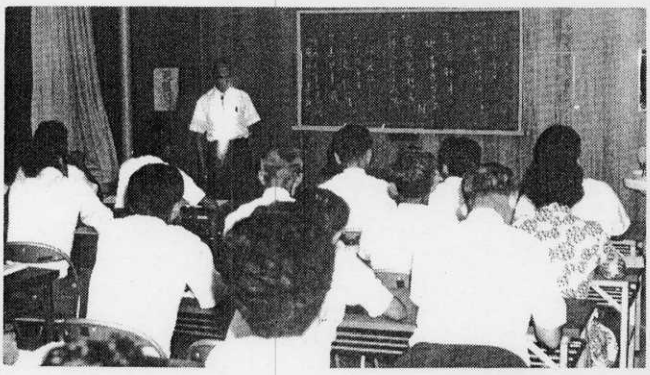
昭和二十六年六月、産業教育振興法が成立。K中学校では、工作・職業を中心に全国にさきがけて生産教育に取り組む。機能と美を追求した実践を推進。当初は校長自ら金策に毎夜走り回り、生産教育の趣旨から始まって、設備の充実の必要性を説いて回ったという。

終戦をさかいに、技能面は技術・家庭科へ、他は創造性を重んじる図工・美術へと、手工は分化していった。

（近藤正三・片岡利夫・永田信男先生のお話から）

# 読書

## ―サークルの紹介―



## 読書箋から読書会へ

―二十一人の集い―

「本を読む」言うは易いが実行はなかなか困難なことの一つと思う。

この困難を克服するために、自らに課し読書習慣をつくろうということで発足したのが「今週の読書」である。本を読み記録に残すことは〝行〟のようなものであるが、理屈をつけ読書からのがれようとする気持ちにプレッシャーをかけるには大変役立ってきた。

「今週の読書」は個人の読書習慣形成に役立っても、何人かの共通基盤をもつには至らなかった。同じような仕事をしながら別個な道を歩くようなもので、一面では、むなしさを感じることもあった。

そこで、読書会をもってはどうかという意見が出て定例化していったのが、わたしたちの会である。定例化された読書会は、同じテキストであるために「今週の読書」にみられなかった共同体意識が生まれてきた。

会員で話し合っても有効な会であるが外から講師を招聘することでより高めようとしている。「歎異抄」をはじめたのもそんな願いからである。（文責　稲垣）

## 森信三先生を囲んで

―岡崎読書会―

森信三先生をお招きして、月一回を目途に、読書会を始めて、はや五年になる最初に扱ったのは、春秋社版の山県三千雄著「人間」、文学者の書いた哲学書ともいうべきもので、難解であった。次は私家版の「川口義克先生教育語録」、現在は福田恒存監修の「新聞のすべて」高木書房刊をテキストにしている。

輪読の合間に、森先生に現在の世相に対する厳しい警句を、時には子に対するような、やさしいはげましをいたいきながら、夜の更けるのを忘れる。

毎回、回の初めに〝本の紹介〟をいただくのも、この会の通例になっている。商業主義に毒されている、現在の出版界に馴致されている私たちには、時として奇異に感ずることも、後になってみると先生の時代感覚の鋭さに驚かされることばかりである。

現在、新しい会の発足について準備中。

## 「この一冊」に学ぶ

―梅園小 現職教育部―

この数年間、わたしたちはつとめて本を読もうとしてきた。いかに教師の生活が多忙とはいえ、一日一時間六〇頁程度の読書は、必ずしも難事ではない。月にして一八〇〇頁、年間およそ二万頁、五〇冊の読書は心がけたいものである。

創刊号　後藤金好先生序文より

「この一冊」はつぎの「この一冊」を呼び、さらにつぎの「この一冊」を呼ぶ。読書の核反応で、読書の本道であろう。

第七集　山本甚一先生序文より

梅園小学校の個人研修の一つに、読書発表がある。これは毎週の職員会や現職教育の時に順番に行うものであるが、更に年間に読んだ本の中で、特に深い感銘を受けた本の読後感を小冊子「この一冊」にまとめて掲載している。読後感を自分のことばで表現するのはなかなか大変で何度も何度も書き直し、推考を重ねて書き上げるわけである。ひとりひとりが、なんらかの形で、生や社会、教育に対するもだえの中で、新しい世界観、人生観を思索し、創造しようとしている姿がうかがえよう。しかし刷りあがった「この一冊」を手にするとき、苦悩の後の喜びとおのれの未熟に対する悔恨の気持ちの入りまじった複雑な気分になることも事実である。

# 雑談会から生まれる

―数学読書会―

雑談会がだれ言うとなく始まって数年過ぎたころの、ある日、「新しい指導要領では関数の定義が対応になっているそうだね、どうやって指導するんだ。」という問題が突然だされた。「そうだな。」といって沈黙する者。「忘れちゃった。」と簡単に自分の不勉強を認めた者があった。いずれにしても、今後の指導に不安を持ったことは確実である。

学生時代に勉強したとき以来考えてもみなかったことで、中学生に理解させる方法と自信のなさが頭の中にあったのだろう。

しばらく雑談の後、「何かよい参考書を見つけて読むか。」という発言に一同すぐ賛成した。（七年前のことである）

本読みが始まると、いつも欠席がちであったものが、熱心に出席をし、討論に花を咲かせるようになった。「対応は四種類で、一対一と多対一が関数だね。よくわかった。」と自信を持って発言するまでになった。教材の理解だけでなく仮想指導案をつくっての討論へと進むにしたがって意欲が高まり、ついに日数教の全国発表へと前進した。この会の助言者として教育大の鈴木・柴田両先生のご指導があったことを記しておく。

（南中　鈴木　優）

# おにぎりの読書会

―むすびの会―

「みなさん、今晩は。」午後六時、メンバーが集まる。カチカチ、カチンと数秒間、お皿の音がしておにぎりが運ばれる。「いただきます。」月一回の私たちの会は、このさりげないむすびの素朴なおいしさの味わいから始まる。よも山話でひとしきり笑いが飛ぶ。

今年の読書は、加藤秀俊著「日本人の周辺」。〝看板主義の編〟を紹介すると、「東京郊外の、ある私鉄沿線の盛り場を歩いていて、何よりもすさまじいのは、林立としか言いようのない、大小とりどりの看板である。もしも、看板密度というものがあるとするなら、日本はおそらく世界最高だろう……」と、当番者朗読。

そういえば、家紋、のれん、肩書き入り名刺等、看板主義と思われるものが、私たちの日常生活をとりまいている。立看板からポスターへと児童にも及ぶ。

「看板主義という造語の奥にあるものを考えてみよう。」と講師先生、「看板だおれ。」「そうね。」それぞれ自分をいましめる。……もはや、解散時間。

三年目を迎えた本会は、今年から加えた読書記録に、一同、悲喜こもごも。

（福岡小　黒野喜美）

# 子どもの本を読む

―岡崎童話研究会―

教師が子どもの本を読まなくて、どうして子どもに読書をすすめることができようか。

本会では、このような趣旨で童話の本を読み合っているが、最近の様子を記して紹介にかえたい。

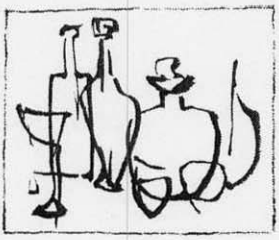
テキストは、今年の課題図書の中から「おしいれのぼうけん」と「白い川の白い町」をとり上げる。

提案者から、「おしいれのぼうけん」について、子どもに読ませた反応をもとに、意見が出される。子どもを強く引きつけるこの作品のよさや、逆に、新鮮味に欠ける発想に不満が出される。若い教師だけに鋭い意見。

これをめぐって、現代っ子の心理に合っているという賛意や、ファンタジックなさし絵にも共感が述べられる。

「白い川の白い町」。これは最近の作品では珍しく社会問題を取り上げたもの。河川の汚濁の原因を追求する少年を、推理小説的な手法で描き出している点、新しい試みとして評価された。しかし、材料が十分消化されておらず、果たして小学校五、六年の児童にアピールするか疑問視するむきもあった。「複合汚染」と比較した批評も出るし、文学としての価値を論じたりして、話はつきない。

（大樹寺小　鶴田紀美子）



講演要旨

# 化学と文明

赤松秀雄

化学が物質文明の基盤になったのは、近々、二十年か三十年のついこの間のことです。我々の生活に切り離せない鉄時代は一九世紀ですが、その鉄に匹敵するように、プラスチックなどの化成品が衣食住の生活の中にはいり込んで、物質文明から切り離せない重要なものになりました。しかも、その二十年か三十年のわずかな期間に我々がどんな問題に直面しているか考えてみたいものです。

人間が耕作をはじめて、自然のエコシステム＝物質間の収支のバランス＝に干渉するようになってすでに一万年の歴史がありますが、この二十年か三十年の間にその流れに急激な変化を及ぼしました。これは、まさに化学が石油というものを利用したからだと思います。鉄というものは、例えば、橋を作ったり建物を作ったりして、後々に残る投資型の性格を持っていますが、化成品というのは、消費型の品物であります。したがって消費型の経済を促すことになり物資の消費も急激に増すことになりました。石油経済の時代がまだ三十年に満たないのに、早くも限界がみられるようになったのも、そういう消費型のものであるという性格だからです。

人類は自然に干渉し、自然のエコシステムを壊してまいりました。人類自身が収支のバランスの保持をして行かなくてはなりません。しかるに、人類は今まで、石炭や石油のような数千年ないし数億年にわたる自然の蓄積を食いつぶしています。かつては、自然から得られるエネルギー、あるいは資源というものは限りなく、限界というものを考えませんでした。産業活動が増大し、ことに消費型の物資が多量に生産されると、エネルギーも資源も限界が見えてきました。そして、産業廃棄物を捨てる場所さえなくなってまいりました。

これを解決しようとすると、政治、経済、化学がからみ合い、しかも、一つの国ではどうにもならない、全世界的な規模のもので、そう簡単にはまいりません。これは、単に自然というものに対するノスタルジーだけではすまされない問題です。

化学的な立場からこの問題を考えますと、限られた資材の中で、人間がいつまでもその繁栄をするには、やはり、私は資材を繰り返し利用することであると思います。すなわち、循環をはかることです。

太古の森の中で、森がいつまでも森の姿を保つのは、その中で植物が生産部門を、動物が消費部門を、水やダニが環元部門を受け持ち、それぞれ役割を分ちながら、互いに調和し合って、生命活動を維持しているからです。生命における物質のあり方というものを考えると、それは循環の原理が保たれているのです。

文明の基本にもそういう原理を講じなければならないと私は思うのです。化学の立場から見ますと、私たちの利用するものは、消費資材になってきました。しかし、ここに物質循環の原理を取り入れることができましたならば、それは悲観すべきことではないと思うのです。我々が鉄時代を築いて以来、およそ、百五十年ほどになりますが、このことについてはあまり問題になりません。それは、鉄が金属の中でも循環し得るものだからです。

自然界で、酸素と水素の循環がきわめて巧妙に行われていることは、光合成と呼吸作用の循環でお解りだと思います。炭素の循環は天然ではまだ行われていませんが、炭素化合物である化成品に対しましても、炭素や水素の循環の原理をあてはめることができますならば、これは非常に希望の高いものだと思います。

化学という学問は、元来物質循環の原理を追求するサイエンスです。炭素と水素の循環の原理を解決することが、切に望まれるわけであります。

（国立分子科学研究所長・九月二十八日市民大学講座より）

## かがみ

### 「Hの訪問」

尾崎　貴美子

久し振りの日曜日で眠りを貪っていると、実家から「すぐ来い」との電話。慌てて行ってみると庭でHが遊んでいるではないか。たまの休日なのにと腹立ち紛れの「どうしたの」という質問に「先生がいつでも遊びにおいでと言ったから来たのにお嫁さんに行っちゃったんだね。」とHが答えた時、ズキンと胸が痛んだ。

Hは、講師として初めて教壇に立った時の鼻たらしのぼうずである。何度か授業を妨害され泣かされたが、一番かわいかったのも確かである。

短いつきあいからの別れ「いつでも遊びにおいで。」その場の感傷からだけではなかったはずなのに、いつしかあの頃のような子どもに対する目の向け方を忘れてしまっていた。教師生活に慣れかかっていた私への戒めの半日であった。

（河合中）

おしらせ

【寄贈刊行物・資料等】

◇子どものめあてを育てる　矢作北小学校

全校六百二十人の童心に光をあてた心暖まる教師の記録。

◇みんなで見つめてひとりひとりを伸ばす指導　香山中編

学校の特性を生かして取組む授業と学習態度育成の研究実践。

# 第三回教育文化賞決まる

## 創意と努力の業績二氏・三団体

第三回の教育文化賞受賞者に個人二氏、三つの団体が決まり十五日午後岡崎信用金庫中央支店ホールで授賞式を行う。

当日は市教委、竜城ライオンズクラブ（武田繁会長）の表彰のあと、NHKアナウンス顧問青木一雄氏の記念講演を聞く。受賞者は次のとおり。

〈個人〉▽梶尾長夫氏（岩津中教諭）＝学級通信による学級づくりと社会科教育研究▽権田梅芳氏（美合小校長）＝児童相互訪問による日加親善と国際理解の教育

〈団体〉▽岡崎女性コーラス（代表・伊藤敏子さん）＝主婦のみで続けた長年のすぐれた音楽活動▽六ツ美悠紀斎田保存会（代表・細井由之丞氏）＝斎田儀式の伝承保存とふるさと運動の推進▽現職教委図工美術部（畔柳栄一部長）＝「おかざきっ子」展による造形教育の推進。

■**男川小研究発表会**　12月9日▽主題＝あたたかい人間関係にたった学習集団の育成▽日程＝公開授業（教科、生活の時間）研究発表、分科会協議、講演　奈良女子大附属小塩見栄先生。

〈表紙〉**佐々木月樵氏**

三河が生んだ真宗教学の第一人者。大正13年大谷大学学長に就任。仏教を学として学界に公開し、教育として国民に普及し、併せて宗教的人格を陶冶することを念願した。安城市の寺に生まれ、岡崎市佐々木町の上宮寺を継ぐ。大正15年没。

# 昭和50年度秋季小中学校各種競技記録

### 第8回中学校新人総合体育大会成績

10月9日～10月26日

| 種目 | 性 | 優勝 | 2位 | 3位 |
|---|---|---|---|---|
| 陸上競技 | 男 | 葵 | 矢作 | 甲山 |
| | 女 | 甲山 | 城北 | 矢作 |
| 軟式テニス | 男 | 矢作 | 常磐 | 福岡・附属 |
| | 女 | 南 | 城北 | 河合・六ツ美 |
| 剣道 | 男 | 城北 | 東海 | 南・常磐 |
| | 女 | 葵 | 甲山 | 東海・美川 |
| バレーボール | 男 | 岩津 | 竜海 | 甲山・南 |
| | 女 | 矢作 | 城北 | 福岡・岩津 |
| 卓球 | 男 | 竜海 | 矢作 | 葵・岩津 |
| | 女 | 六ツ美 | 南 | 甲山・竜海 |
| 体操競技 | 男 | 竜海 | 甲山 | 葵 |
| | 女 | 南 | 葵 | 矢作 |
| ハンドボール | 男 | 城北 | 六ツ美 | 美川・葵 |
| | 女 | 六ツ美 | 葵 | 岩津 |
| 柔道 | | 2年の部 1位竜海、2位美川 | | 1年の部 1位美川、2位竜海 |
| ソフトボール | | 甲山 | 矢作 | 葵・岩津 |
| 軟式野球 | | 甲山 | 岩津 | 美川・城北 |
| バスケットボール | 男 | 美川 | 岩津 | 南・葵 |
| | 女 | 矢作 | 六ツ美 | 葵・附属 |

### 第14回小学校陸上競技大会　11月2日公園グランド

| | 優勝 | 2位 | 3位 |
|---|---|---|---|
| 男子総合 | 三島 | 岩津 | 梅園 |
| 女子総合 | 梅園 | 三島 | 矢作南 |

### 陸上競技個人記録（中学校）

10月19日公園グランド

| 種目 | 男子 氏名 | 校名 | 記録 | 女子 氏名 | 校名 | 記録 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 100M | 佐藤見一 | 葵 | 12″2 | 辻村直美 | 城北 | 13″6 |
| 200M | 牧能成 | 葵 | 25″0（新） | 飯田絹子 | 城北 | 28″5 |
| 800M | 嶋井郁夫 | 葵 | 2′19″4（新） | | | |
| 2000M | 武居美佐夫 | 甲山 | 6′40″8 | | | |
| 80MH | | | | 竹内晶子 | 葵 | 13″5 |
| 100MH | 及川憲一郎 | 矢作 | 16″4 | | | |
| 400MR | | | | 城北 | | 55″8 |
| 800MR | 葵 | | 1′46″1 | | | |
| 走幅跳 | 佐藤見一 | 葵 | 5m86（新） | 飯田絹子 | 城北 | 4m82 |
| 走高跳 | 宮嶋幸男 | 香山 | 1m55 | 広山啓子 | 城北 | 1m35 |
| 砲丸投 | 宮嶋幸男 | 香山 | 12m75 | 山本初美 | 東海 | 10m73 |

### 個人記録（小学校）

| 種目 | 男子 氏名 | 校名 | 記録 | 女子 氏名 | 校名 | 記録 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 100M | 太田一成 | 三島 | 13″7 | 山本香保 | 三島 | 14″3 |
| 1000M | 松本久 | 梅園 | 3″23″0 | | | |
| 60MH | 渥美直樹 | 矢作西 | 9″8 | 槙野るり | 六ツ美北 | 9″9 |
| 400MR | 広幡 | | 57″1 | 三島 | | 1′00″1 |
| 低400MR | 山中 | | 1′01″8 | 細川 | | 1′04″4 |
| 走幅跳 | 水越啓介 | 岩津 | 4m58 | 河村聖香 | 矢作南 | 4m00 |
| 走高跳 | 近藤聖一 | 根石 | 1m35 | 太田恵子 | 矢作南 | 1m25 |
| ソフトボール投 | 附柴宕昌 | 竜谷 | 72m20（新） | 柏木葉子 | 梅園 | 45m65 |

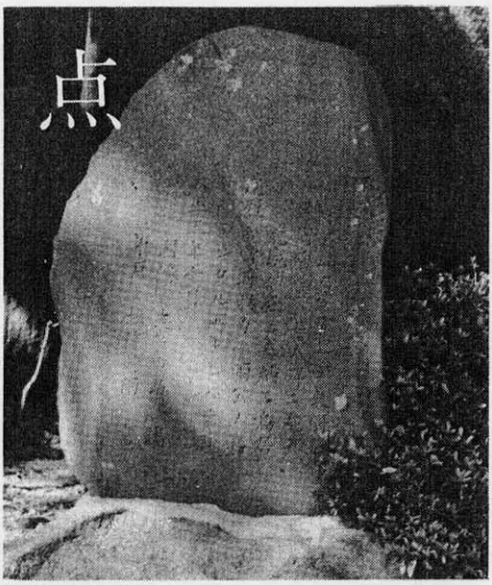
## 点

### 殉難烈死を讃える碑

岡崎城の大手門跡に、志賀重昂の文になる小さな碑がある。

志賀重昂全集第六巻に「アラモは米国の長篠なり、長篠は日本のアラモなり、長篠の戦の壮烈を知る者、アラモの戦を知らざるべからず」と記されている。

テキサス独立戦役殉難烈士に感銘した氏は、岡崎産の花崗石でアラモの地に碑を建てた。その台石には、鳥居強右衛門の墓畔で得た二石の内一石が使われたという。



**所在地**　岡崎公園内

## この本を

**唐招提寺への道**　東山　魁夷　新潮選書　¥八〇〇

**敬語**　大石初太郎　筑摩書房　¥八〇〇

**邪馬台国に雪は降らない**　高津道昭　講談社　¥八二〇

**日本語の感覚**　外山滋比古　中央公論　¥九五〇

**東洋の心**　鈴木　大拙　春秋社　¥六〇〇

**数学の雑記帳**　矢野健太郎　新潮社　¥五五〇

**油断**　堺屋　太一　日本経済新聞社　¥八五〇

**良寛正之白隠**　水上　勉　秋田書店　¥一二〇〇

**日本人の周辺**　加藤　秀俊　講談社　¥三七〇

**新日本語論**　金田一春彦　筑摩書房　¥九〇〇

## 寸言

▲サークル活動で育ち、放談後の読み返しで実る。内容、内容という読書会に看板倒れはないか。

▲先手と後手。囲碁や将棋の勝負の世界はきびしい。先手教師に後手弁護士。ともに油断は大敵。

▲点の散策、また楽しからずや。

・カット
**加藤　洋子**（南中）

## 11月の行事

| 日 | 曜 | 行事 | 日 | 曜 | 行事 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土 | | 16 | 日 | 児童・生徒心臓疾患精密検査（医師会館）<br>岡崎市民マラソン大会（県営グランド） |
| 2 | 日 | 小学校陸上競技大会（公園）<br>おかざきっ子展（東公園3日まで） | 17 | 月 | |
| 3 | 月 | （文化の日）岡展表彰式（美術館） | 18 | 火 | 広幡小研究発表会　小学校音楽教育講座（県センター） |
| 4 | 火 | 西三地区就学指導委協力委員会（西三事） | 19 | 水 | 定例校長会（愛宕小）　附属養護学校研究発表会 |
| 5 | 水 | 三河教頭研修会（豊川） | 20 | 木 | |
| 6 | 木 | | 21 | 金 | |
| 7 | 金 | | 22 | 土 | |
| 8 | 土 | 教研愛知県集会（東海市9日まで） | 23 | 日 | 岡崎のハーモニー（市民会館）<br>技術家庭科作品展（市民体育館24日まで） |
| 9 | 日 | 西三中学校新人陸上記録会（県営グランド）<br>岡崎の紅葉まつり（東公園24日まで） | 24 | 月 | |
| 10 | 月 | | 25 | 火 | 新任教員研修会（中学校）小学校修学旅行（28日まで） |
| 11 | 火 | 新任教員研修会（小学校）<br>小学校音楽教育講座（県センター13日まで） | 26 | 水 | 竜海中研究発表会 |
| 12 | 水 | 月報編集委員会（市役所）社会教育審議会（市役所） | 27 | 木 | |
| 13 | 木 | 定例教育委員会（市役所） | 28 | 金 | |
| 14 | 金 | 西三ＰＴＡ指導者研修会（吉良町） | 29 | 土 | 西三中学校長距離継走大会（県営グランド）<br>市子ども会大会（市民会館） |
| 15 | 土 | 教育文化賞授賞式（岡信中央支店）<br>市教頭研修会（真福寺16日まで） | 30 | 日 | |